

5-5					
主題	大腿骨転子部骨折となった入所者への他職種連携による生活リハビリの重要性				
副題	日々の積み重ねにより、自立歩行の再獲得に向けた取り組み				
キーワード 1	多職種連携	キーワード 2	生活リハビリ	研究(実践)期間	4ヶ月

法人名・事業所名	社福) 育秀会 第3育秀苑				
発表者(職種)	高野賀史(機能訓練指導員)、棚木春樹(特養主任生活相談員)				
共同研究(実践)者	石井時子(看護師)、芦田秋奈(ケアマネジャー)、藤川智子(ユニット統括リーダー)、他				

電話	03-6904-0105	FAX	03-5968-8040
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	練馬区土支田に、平成25年に開設した、ユニット型介護老人福祉施設です。「ひとりひとりの笑顔をもとめて・・・」を理念に掲げ、ユニットケアに取り組んでいます。御利用者様一人ひとりに寄り添い、安心・安全で快適な暮らし作りとは何か、を考えケアに取り組んでいます。				
-------	---	--	--	--	--

### 《1. 研究(実践)前の状況と課題》

大腿骨頸部・転子部骨折を受傷した場合、利用者のADLは低下し、受傷前のレベルまで回復するのは困難になってしまう。当苑においても、過去5年間に135名の方が入所され、入所後に転倒・滑落等によるものと思われる受傷者は10名で、これは、全入所者数の7.4%の発生率となっている。それにより、以前は可能であった歩行動作が困難となった利用者は9名を数え、ADLに重大な影響を及ぼしている。

今回、転倒により“大腿骨転子部骨折”を受傷した利用者が、多職種協働による生活リハビリと個別機能訓練との相乗効果により、歩行レベルの改善と、生活行動範囲を拡大させた事例について報告する。

### 《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

氏は、受傷前は自立歩行が可能であった。帰苑後はPick up 歩行器使用での歩行だったが、以前の様に自立して歩ける様になりたいとの希望があった。そこで、週2回程度の個別機能訓練以外に、多職種との連携を図り、生活リハビリを積極的に取り入れる事で、歩行レベルの向上を目指した。それにより、受傷前には可能であった、近所のコンビニエンス・ストアへ歩いて買い物に行けるまでの歩行レベルの回復を期待して実践を試みた。

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

- ①氏の退院後にケア会議が開かれ、相談員、CM、CW、Ns、管理栄養士らと情報共有を行った。
- ②リハビリテーション評価は、身体面では、疼痛評価、ADL評価、筋力検査、ROM-T、下肢荷重量測定、認知面は、MMSEにて評価を行った。
- ③上記評価により、個別機能訓練としてのプログラムは、両下肢の筋力の維持と向上、股関節を主としたROM-ex、及び、Pick up 歩行器使用による歩行訓練を週2回のペースで行っていき、歩行機能の向上を

目標とした。

④日常的に、CW、CM等の職員から情報を収集し、機能訓練指導員は、訓練後の評価を多職種へ随時フィードバックして、多職種間での情報共有を行っていった。

#### 《4. 取り組みの結果》

退院時では、Pick up 歩行器で15m程度の歩行が可能な状態であったが、徐々に歩行レベルが改善され、見守りによる4点杖での歩行が可能となった。最終的には「外へ散歩に行きたいわねえ・・・」といった希望も聞かれるようになってきた。

#### 《5. 考察、まとめ》

N様の歩行機能の維持・向上が可能となった要因として主に、以下の3点が考えられる。

##### ①N様のモチベーションの高さ

日常生活の中で、身体を動かす事に積極的であり、ご自身の日々の努力があったため歩行機能が向上できた。

##### ②多職種連携

帰苑当初にCWよりの提案として、居室内ベッドとトイレ間の移動距離を以前の距離より短縮し、“生活リハビリ”による歩行機会を設けた。次に居室からリビングの座席までの距離を当初は約4mと設定し、歩行機能の安定とともに距離を延長させ、生活環境の中で歩行機能の向上を目指した。CWとは、情報共有を行い、日々の変化や気づきを報告して貰った。

##### ③個別機能訓練

継続的な個別機能訓練により、両下肢の筋力、歩行バランス等が向上し、徐々にPick up 歩行器による歩行が安定していった。更に段階的に4点杖による歩行を取り入れた事により、歩行レベルが向上した。

#### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

#### 《7. 参考文献》

1)総合リハビリテーション：医学書院，2017，3月号

2)編集 整形外科リハビリテーション学会：～整形外科運動療法ナビゲーション：メジカルビュー社，2010

3)原著 Kirsten GÖtz-Neumann、訳 月城慶一、山本澄子、江原義弘、盆子原秀三：観察による歩行分析：医学書院，2006

#### 《8. 提案と発信》

特養での個別機能訓練を実施するに当たり、本人の認知機能や、意欲が重要になってくる事は言うまでもなく、氏に関わった介護職員達の目に見えない日々の努力や、本人の意思、そして、エビデンスに基づいたリハビリテーションを“多職種連携”という形で積み重ねた結果として、歩行レベルの改善に繋がった本事例を今回発信する事ができたら幸いに思います。